

## 出来事カテゴリーと時間意識

伊佐敷 隆弘 (Takahiro Isashiki)

日本大学

あらゆる変化は時間の中で生じている。風にそよぐ木の枝は時間の中でその位置を変化させている。しかし、木自身は（おそらく）その変化に気づいていない。木には（おそらく）心がないから。木は自らの変化に気づくことなく時間の中で変化し続ける。他方、電車の中で揺られる私は自分の身体が揺り動かされていることに気づいている。私には心があるから。このように私は自分の身体位置の変化に気づいており、かつ、この変化は時間の中で生じているから、私は時間を（何らかの意味で）意識しているはずである。つまり、私は（木とは違い）自らの変化に気づきつつ時間の中で変化し続けている。

意識の満たすべき最低条件は覚醒であろう。覚醒とは、睡眠や昏睡状態でなく、目覚めているということである。成人した人間の意識には、覚醒にさらに選択的注意や自己意識が加わっている。風にそよぐ木は覚醒しておらず、意識を持たないから、自らの変化に気づかない。

意識に対しては常になんらかの変化が現れている。外界にまったく変化が生じていない場合ですら、意識に現れる経験内容は更新され続け、常に新たな経験内容として現れる。とすれば、どんな意識であれ、覚醒している限り、そこに何らかの時間意識が伴うはずである。

しかし、それはどんな時間意識なのか。人間の成人と比べた場合、動物や幼児（あるいはロボット）が持つ意識は不十全である。そして、不十全な意識には不十全な時間意識が伴っているであろう。では、不十全な時間意識はいかなる意味で不十全なのか。この問いに（部分的にだが）答えることが本発表の目的である。具体的には、「出来事カテゴリーとの関連」および「距離的時間枠組みと位置的時間枠組みの区別」に即してこの問いに答える。なお、本発表でおこなうのは概念分析と現象記述であり、意識の物質的基盤に関する問題や独我論・心身問題などの形而上学的問題には立ち入らない。

まず、或る冬眠する動物のことを考えてみよう。その動物は、秋が過ぎ去ろうとしていることを知っているが、今年の秋と去年の秋を区別することは（おそらく）できない。つまり、秋が繰り返したことに気づかない。言い直せば、この動物は出来事タイプと出来事トークンを区別することができない。それゆえ、この動物はエピソード記憶を持たず、この動物にとって過去・現在・未来は未分化なままである。

次に、3歳児に関する或る実験を紹介する。その実験によれば、3歳児は過去の出来事と現在の状態の間の因果関係を推論できない。（4歳児はできる。）他方、

3歳児は一連の出来事連鎖をことばでたどってみせる能力を持つ。これはスクリプト的知識である。さらに、実際に生じた出来事がスクリプトの中のどの出来事であるかを彼らはことばで表現できる。ただし、その際、生じた出来事を「完了したもの」としてアスペクト的に捉えることはできるが、「過去の特定の時点に位置するもの」として捉えることはできない。

スクリプトという一般的知識を個別的出来事に適用できる以上、3歳児は出来事タイプと出来事トークンを区別している。しかし、3歳児の持つ出来事カテゴリーは原初的なものである。というのは、それらの出来事は、アスペクト（「完了」「進行中」「未了」）は持つが日付を持たないからである。それゆえまた、3歳児はエピソード記憶を持たない。

ところで、時間枠組みには、距離的時間枠組みと位置的時間枠組みの2種類がある。距離的時間枠組みには、①指標性を持つ、②行為のタイミングを導く、③記憶の強さや明瞭さの変化によって知覚される、という特徴がある。他方、位置的時間枠組みは一種の概念であり、①指標性を持たない、②行為のタイミングを導けない、③日付や自然的・文化的時間パターンについての知識によって知られる、という特徴を持つ。冬眠する動物や3歳児の持つ時間枠組みは距離的である。これに対し、成人した人間は距離的と位置的の両方の時間枠組みを持ち、かつ、両者を関連付けることができる。位置的時間枠組みは、日付をとまなう十全な出来事カテゴリーを持つことによって初めて可能になる。

人間の成人の十全な時間意識に対し、冬眠する動物や3歳児の持つ時間意識は、①出来事カテゴリーの欠如（動物）ないし不十全さ（3歳児）、②位置的時間枠組みの欠如、③エピソード記憶の欠如、という3点で不十全である。このように、「十全な出来事カテゴリー」「位置的時間枠組み」「エピソード記憶」の3者は緊密に関連している。

以上のように、不十全な時間意識と十全な時間意識を並べ、時間意識の一種のスペクトルを作ってみると、その端に最も原始的な時間意識を推定することができる。この最も原始的な時間意識において、変化は知覚されるが、いかなる規則性も知覚されない。冬眠する動物や3歳児が知っている規則性すら知覚されず、変化だけが知覚される。すなわち、規則性なき変化が知覚される。そこにはその場かぎりの記憶しかない。成人の人間である我々の場合、見かけの現在という時間意識から他のあらゆる時間意識の要素を抜き去ると、この原始的な時間意識の痕跡を垣間見ることができる。